写真＝柳田由人／ウィズ・フォト　文＝増田高志（af imp.）

スタディ
老舗BMWショップ
揺るぎない矜持
鈴木康昭

メイクオーバー
新鋭Audiショップ
鮮烈なる想い
木内 努

闘志がみなぎる それぞれの主張。

決してBMWは悪くない。それでもアウディの斬新な取り組みに惹かれました。
デザインやメカニズムに常に新しい風を導入する意気込み……。
それが刺激になってやる気がわき起こる。この刺激を活かすも殺すもセンス次第。

ボクのセンスが通用する限り突き進みます。

今、アウディがアツい。これはBMWという起爆剤があるからこそ。パワフルに燃え上がっているからだ。控えめな文科系だったアウディと積極的な体育会系のBMW。この関係が少しずつ時間をかけて変化した。お互いがキャラクターに磨きをかける

狙っているターゲットは同じでも手段がまったく違うから面白い

アウディにはアウディなら5ではの魅力があり、BMWにはBMWだけにそなる良さがある。もちろん、それぞれの持ち味を比較することは無意味だし、優劣はつけられない。

それでもアウディとBMWは意識されている。ユーザーにとっても、ショップにしても、さらにはふたつのメーカー同士自体だって気にし合っているのに間違いはない。

90年代の初頭までは地味な存在だったアウディ80。気品に満ちて女性にも人気が高い存在だった。それが

楽しく走れることが大前提です。

90年代の中ばに車名をA4に変更、新鋭感性を携えて生まれ変わったのだ。

ここがきっかけだ。

もちろんA4の、4はBMWの3シリーズの「3」にぶつけた数字となる。「ライバルの3シリーズよりも魅力があるから4にしました」みたいな戦略だろう。

とくにドライビングの好きなユーザーにとって3シリーズは模範的で、

アウディが生み出す能力を阻害するようなコトはプロとして許されません。だからルックスと、パフォーマンスを両立させます。

〝羊の皮を被った狼〟は好きじゃありませんね。

→遠き最優先の無骨なアウディは作らないという木内サン。派手にやり過ぎてないスタイリッシュなフォルムがリ。機能もやり過ぎないのがお酒落だ

make over
TEL.045-512-9350　www.make-over.jp　神奈川県横浜市都筑区大丸26-1

しかもジャストサイズなクルマなので高い人気を誇る、3シリーズは独壇場のジャンルを持っているのだ。

そこにアウディはA4を繰り出したのだ。もちろん、3シリーズばかりでなく、5シリーズやアシーズに対してもA6やA8で立ち向かう。

さらに、M、に対しての、RS、というようにスポーツモデルなので特別感にも徹底的に目を向けている。こうしたアウディとBMWのアプローチが、お互いの切磋琢磨に結びつき、さらなる魅力を引きだしている。

アウディが得意なショップ、メイクオーバーの場合、四輪駆動をラフロードの走破性からオンロードの安定性に取りれたたり、スムーズな6気筒とコンパクトな4気筒を融合させた5気筒エンジンの活用など、常に奇抜なことを積極的に取り入れているアウディの意気込みを反映させている。知的でいてお洒落なダンディフォルムの構築が得意なのだ。

いっぽう、BMWの専門ショップであるスタディの場合、エンジンメーカー出身らしく、滑らかな6気筒エンジンへのこだわりや、運動性の向上のために前後輪の重量バランスを50対50とする取り組みなど、基本に忠実なBMWらしさを引き出す。

ふたつのショップの個性はアウディとBMWの特色が象徴されている。

アウディに限ら子多くのクルマを経験することで他には味わえないBMWの素晴らしいフィーリングが確認できました。人間の感覚とよく似ているんです。

指を曲げたり、肘を折ったりする行為と同じようにドライビングできてしまう凄さ……。

ワタシは、この特性を引き抵抗することを決意しました。

Studie TOKYO
TEL.043-367-5301　www.studie.jp　東京都府中市若松町2-27-22

↑BMWのことなら何でもこなせる真の専門店。1メーカーでも情報収集は大変だ。今後、ますます増えるハイブリッドカーや電気自動車をどうイジるのか鈴木サンを驚い立たせる

バランスの良さが活かせなければ手は入れない。

この〝勇気〟を忘れないようにしています。アモーカーはテスト的なトライをする場合がありますがユーザーに対しては過激なメニューは奨めません。木水くBMWと付き合ってもらう気配りですね。

Audi vs BMW
鮮明のライバル対決

↑一生付き合うと決めても納刃に後悔しない魅力を持つBMW。そのサポートを行うために全力で対応するのがスタディの使命となる

BMWのモディファイを〝文化〟として確立させるために邁進します。

最終的にはBMWの遊園地を築き上げたい……。サーキットがあって、ショップがあってディーラーだってある

BMWフリークにはたまらないスペース。子供からオトナまで楽しめる夢のテーマパークを目指します。

BMW 335i
↓BBS RZ-DC組み合わせるタイヤのブルーアースAは前が225/35R19で後ろが255/30R19。足はビルシュタインBBSキットで、ブラックグリルとマフラーがM/パフォーマンス、レカロTS-Gはアルカンタラで張り替え済

く。寄ってし加減や流行の取り入れは、まさにスタイリストだ。

スタディの鈴木サンは前のロクス時代に出会ったレーシングダイナミクスでBMWの車にはった。17年前にスタディをデビューさせた頃からボンシーは一貫している。スタイルアップやチューニングといった作業内容での専門店ではなくBMWの遊園地を築き上げたい。

サーキットがあって、ショップがあってディーラーだってある。

F30の3シリーズのように、奇をてらうよりも確実性を優先させて少つつ進化させていく、大きく進めるとカが、間違ったと気づいたときの修正が大変だからだ。

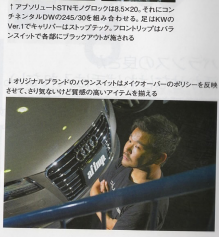
モータースポーツへの参戦は本国BMWとのパイプを太くするため、スタディのスタート当初からの夢のプロジェクトだった。12年の時間をかけて5年前についに実現、奇跡的な結果も感動も手に入れた。夢を実現してきた鈴木サンだからBMWのテーマパークだってきっと築けるだろう。

といろブランドの専門店であることの徹底だ。さまざまな車種が相手だと特色を出すのが難しい。そこで敢張らずに1メーカーに的を絞る決断をした。意気揚々としていたアプローチ当初はどんな仲がいい知人のクルマでもBMW以外の入庫は絶対NGとしたほどだ。

ディーラーとしてBMWの専門店を築き上げたい。

Audi A4 Avant
↑アブソリュートSTNモノブロックはB.5×20、それにコンチネンタルDW0245/30を組み合わせる。足はKWのVer.1でキャリパーはストップテック、クロストリップはパランスイットで各部にブラックアウトが施される

↓オリジナルブランドのパランスイットはメイクオーバーのポリシーを反映させて、ホリ気ないけど質感の高いアイテムを揃える



自分流に仕立てたアウディを生活に関わらせることがカッコいいと思っています。

だから最低限の実用性は確保です。

クルマに収合ったあっうえはとっておきライフワークにあったアウディ選びが一番のキモだったりします。

解すると、さらにアウディが好きになった。そんな試練を積んで、アウディのプロショップをオープンさせた。まだ2年も経ってないのにロコミでユーザーが集まってくる。アウディフリークの気持ちを掴めたのだ。

A4を見れればわかるように斑模様際に何の引目もなく乗りつぶれる普通っぽさを重視している。派手過ぎないメイキング、それでいて存在感が出るようにホイールを中心とした必数積層の手数でフィニッシュ。自分のファッションをコーディネイトする感覚でアウディを仕立てていクルマのモデル

アイはショップが多い。第のプランが多い。それほどお店選びは重要だ。さらに突き詰めるとすべてショップを司る人間が最になってくる。つまりクルマ作りは、ヒト、への依存が想像以上に高いのだ。パーツのブランド力よりもプロデューサーの考え方が物をいう。

メイクオーバーの木内サンは輸入車のプロショップで働いていて、いつか大好きなアウディのショップを立ちげることを目標に仕事に精を出していた。しかし、日々の作業で自分に対する技術力のなさを痛感。このままでは、いくら頑張ってもアウディユーザーには認めてもらえないと悟り、プロショップを辞めてアウディのディーラーに入った。そこで年間、メカニックとしてイチからアウディのポリシーを叩き込まれる。しっかりとアウディの魅力を理

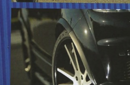
荒野から大都会にやって来た
粋な風雲児。

いなせな履きこなしが命!

素性が良ければ草原を駆け回る野生児だとしても、スタイリッシュな変貌が遂げられる。大自然に立ち向かう肉体は、きらびやかなコンクリートジャングルにだって溶け込める。何よりもベースを活かすセンスこそが重要になってくる!

問◉メイクオーバー
TEL.045-512-9350
www.make-over.jp
写真◉ウィズ・フォト
文◉増田高志（af imp.）

↓サイドフォルムのバランスを矯正したサイドステップ。横から見ても違和感はない



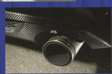
↑ワイド感を導入するためにセットされたフェンダートリムは期待以上の効果を発揮した

デザイン、サイズ、そしてカラーコーデ
ホイールはさまざまな要因で輝く!

↑ウルトラコンケーブの名に相応しく大胆不敵な反り具合。スポーツテイストを導入しつつもスパルタン過ぎない。それでいてパンチ力が大きい

↑ホイールはアブソリュートOMSウルトラコンケーブの10×22。タイヤはコンチネンタル・エクストリームコンタクトの285/30。ローダウンはiiDのロアリングキットで行う

absolute OMS ULTRA CCV 22″



→存在感のあるマフラーはレムスの4.2ℓ用を加工してセットしている。3.0ℓのS/C用は設定がないからだ

←フロントのリップ部にはカーボンシートをセット。見逃しがちなパートでのこだわりが小粋だ

←シャープにするため、リアガーニッシュはスモークプロテクションフィルムを使って存在感を消す

↑フロントとコーディネイトさせるためにリアのディフューザーもカーボンシートを活用している

make over
Audi Q7

無骨な泥臭さをぬぐい去るシティユースのビークル!

風格あるサイズは狙いを誤ると巨漢を持て余した、だらしのないルックスになってしまう。そんな暑苦しさはノーサンキュー。だから大げさなエアロには頼らない。

まわりを惹き付けるための心意気は車高の落とし具合で表した。ペッタンコではQ7のキャラクターが台無しになるし、かといってフェンダーとタイヤのクリアランスがガラ空きだったらハイライトのホイールデザインが沈んでしまう。

スマートな立ち振る舞いで攻めるための落としどころは、ヤリ過ぎに注意して探って見つけ出した。

まばゆさ満点のホイールはセンターディスクをブラッシュドのグレーアルマイトとして軽快感を演出。いっぽうリムパートは塗膜の厚いパウダーコートでのブラック仕上げで、オトナの色気をにじませる。スポーツとムードの融合だ。

さり気ないが意外と効果の高い履きこなし術がフェンダートリムの活用だ。わずか5ミリのワイド化が効きまくり。それまでと雰囲気が変わって存在感を引き出してくれる。

同じようにサイドステップの効果も高い。Q7にセットされているSラインの前後バンパーはボトムエンドが低く設定されている。そのため、横から見るとサイドエンドが上がって見えてバランスが悪い。そこでサイドステップをセットしてボリュームを出して違和感を取り除いた。

艶やかなフォルムは、技アリなひと手間の積み重ねが生み出している。